

別紙 2

審査の結果の要旨

論文題目：思考の分水嶺——パーヴェル・フロレンスキイの思想に見る「形」をめぐる論理

論文提出者：細川瑠璃

提出論文は、20世紀ロシアを代表する思想家、パーヴェル・フロレンスキイ(1882-1937)の思想を、「形」という概念を切り口として、その全貌を浮かび上がらせた、真に意欲的な試みである。フロレンスキイは、モスクワ大学数学部を卒業し、20世紀最新の数学や物理学の知識を持ちながら、天動説を支持したロシア正教の神学者でもあった。さらにフロレンスキイの知の領域は、数学、神学にとどまらず、イコン論などの美術、造形芸術論、言語論からコスモロジーまで、とてつもなく広い。そのため、フロレンスキイの思想の全容を掴み、その特性を伝えることは真に難しく、近年、ロシア本国のみならず欧米でも研究は進んでいるものの、提出論文ほど、フロレンスキイの思想の全体を俯瞰し、その核心に迫った研究は稀有な例であり、世界的なフロレンスキイ研究および、あらゆるもののフィジカル、メタフィジカルな内と外を繋ぐ稜線である「形」に関する考察に多大な貢献を果たした。

本論文は、序章、終章、文献目録、図版を除いて三部構成、全8章、全212頁から成る。以下、その内容を要約する。

序章では、本論の展望として、古来人間が抱いてきた「ものの形とは何か」という問いに対して、幅広い知の領域に関与したフロレンスキイの思想を辿ることにより、有意義な解答が得られるはずであるという点などが挙げられた上で、先行研究の概要を踏まえ対比する形で、本論の構成が示される。

第一部は、『『具体的形而上学』の在り処』と題され、第一章「花序的思考」では、フロレンスキイの思想において「ルネサンス」的世界観に対して「中世」的世界観の復権が目指されていることが確認される。フロレンスキイは「ルネサンス」を合理主義を旨とし普遍と体系に向かうものだとして、そこでは「形」は否定され、個の個別性が捨象されると考え、一方「中世」的世界観は個を個として捉え、「形」に基づくものであり、そこでは学の在り方も、体系的ではなく「花序」的であると考えられたことが指摘される。

第二章「数に具体性を求める」では、フロレンスキイが数学部の師であったブガーエフの不連続関数とモノドロジーの考え方に傾斜しながらも、それらを発展させ、一つ一つの数に固有の内的性質があること、それによりモノダの代わりに数を個別具体的な存在の基本としたことが明らかにされる。

第二部は、「フロレンスキイの思想における『形』」と題され、第一章

『形』とは」では、内的性質と外的あらわれによって浮かび上がる「形」こそが、フロレンスキイによって個が個であることの必要十分な条件と見做されたことが示される。

第二章『形』がたどる二つの文脈』では、フロレンスキイの「形」の思想の背景として、外的あらわれを非本質的・一時的なものとして切り捨てない姿勢に、東方キリスト教における身体の扱い方との類似が見られる点、他方、学術的背景として、ゲーテの形態学からの影響が指摘される。

第三章『形』を前提とした議論』では、「形」という概念がフロレンスキイのあらゆる議論において見られることが、有機体、名、本などを例に明らかにされる。「形」という輪郭の下で、その内と外との入れ替えも可能であること、また輪郭の破れもあり、その破れにおいては、捉え難い神秘や無限が垣間見えることも指摘される。

第四章「内的一貫性と実体性」では、「形」なすものが実体としての強度を伴って存在するというフロレンスキイの考え方が、虹、言葉、煙を例に明らかにされる。さらに、記述と対象に関して、両者が一致して重なり合うとき、両者が一体化し実体となると考えられている点が指摘され、記述と対象によって一個の「形」として現出した「具体的形而上学」は、「ルネサンス」的世界観の一つの反証となる点も明らかにされる。

第二部で一旦その自己完結性のもとで閉じたフロレンスキイの思想における「形」が、「コスモロジーへの展開」と題された第三部ではコスモロジーに展開されていく過程が示される。第一章「イコン論」では、イコノスタス（教会で至聖所と信徒を隔てるイコンの壁）が、地上と天上の境界でもあり、接線でもあることが指摘される。

第二章「宇宙論」では、フロレンスキイの著作『幾何学における虚数性』で語られた宇宙論について論じられている。ダンテ、ポアンカレ、アインシュタインらの議論に基づき、内的性質は実無限と不連続性であり、外的あらわれは非ユークリッド空間や二圏性などの構造であるこの著作によって、フロレンスキイが、不連続と実無限から考えられる神と、地上の我々が表裏一体に接触している関係を示して見せたことの存在論的意義が考察される。

終章では、本論全体の意義が次のようにまとめられている。フロレンスキイの思想にとって「形」がもつ重要性が明らかになり、信仰と科学がいかに絡み合い、その融合と拮抗が何を生み出したか、また形が、個を個として浮かび上がらせる基本原理であることを主張するフロレンスキイの思想は、「形」を分解・分析して何かを究明したように見做す「ルネサンス」的世界観への反証である。

審査委員会では、本論文の着眼点の独創性、論証の説得性に高い評価が与え

られた。本論文の成果として、以下のような点があげられる。数学から神学に至る多岐に亘る知の領域で論を展開したフロレンスキイの思想は、その全貌を掴みにくい。それを「形」という一見平凡であるが実は深い意味をもつ適切なコンセプトにより思想の全体をまとめ上げることに成功した。フロレンスキイの主張は、合理主義を旨とし体系化に向かう「ルネサンス」的知のあり方を否定し、対象を分解・分析せずに個を個のまま把握しようとする「中世」的世界観の復権を唱える「近代の超克」であったことを多くの具体例を挙げて立証した。20世紀初頭は、ロシアでは思想・芸術が19世紀のプーシキンの時代に次ぐ「銀の時代」と呼ばれるが、本論文では、フロレンスキイの主要な著作を読み解くことにより、「銀の時代」のロシアで花開いた文化の多様性——ロシア思想のみならず西欧哲学や東方キリスト教など多様な知や思潮が合流し、対立と融合がなされた様子が明らかとなった。また、フロレンスキイの思想においては、不連続、実無限といった数学の概念が数学を越えた問題として、天上や神と結びついた点も説得力をもって説明された。

以上のように、本論文には多くの長所があるが、審査においては、いくつかの注文も出された。本論文の成功は、フロレンスキイ自身の多種多様な著作を丹念に読みこんだばかりでなく、数学、西欧哲学、キリスト教思想などの多分野の資料にも目を配ったことによるが、西欧の同時代の他の思想家との比較が足りない点、東方キリスト教の特性として取り上げられているものが、実は西方も含むキリスト教全体の特性ではないかと思われる点、フロレンスキイの引用箇所について、イタリックなどの強調が正しく反映されていない箇所が散見される点などが指摘された。

しかし、これらの大部分は本論文の欠点というよりは、今後の研究をさらに展開する際の課題というべきものであり、提出論文が世界的なフロレンスキイ研究に新たな大いなる貢献をなしたことは間違いない。したがって、本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するに相応しいものであると認定する。